新花道・大和流

瓶華
盛花

雪之巻

完

特261
678
1
2

始

特261
678

帝國圖書館藏

瓶華
盛花

大和流・雪之巻

（目録）

○現代生花の理念
○素材としての自然
○全体的同化
○生花構成の標準
○藝術構成の形式
○陰陽と數
○山里水の三界
○素材の自然性
○自然に對する親みと愛
○素材表現の基準
○觀照の角度的形式
○表現上形式の變化
○祝儀の花

北村大星子氏寄贈本

抛華盛花 大和流壺の巻

◎現代生花の理念

現代の生花は(抛華(投入)盛花)規矩的傳統の羈絆乃至抜き思想や舊慣習の桎梏を脱して全く開放された新き世界への飛躍であり全愛に基く自然美の開発であり明るき観照への具象美の完き世界の表現である。即ち生花は自然の上に更に築かるる自然の世界である限り自然の客観性を尊重し何所迄も其の個性の暢達に志向するにある。主観の主張は常に自然の前に従順にして忠實に自然美の藝術完成に服從する事である客観は第一義的であり主観を第二義的に置てこそ自然の本質か克く明に闡明され其所に自然の本性と自我の個性とか融合一致し一元して全体的華道藝術の世界か完成され觀照の尊さか明達さるるのである。されは何所迄も自然を自然とし我個の思想感情は求

むる自然美の増長に役立つ範囲に其伸縮性を加減すべきである。從つて我個の放漫にして徒らなる主張は終に自然美の破壊であり今日に生きんとする藝術理念と云ふ事は拙業積重ね要するに現代花道藝術は厳造する有機的自然の表現であつて自然の地理的歴史的全体的表明であり明るき全霊的本性の主張と其体現であり人我の構成する藝術への表現可能の世界観である。蓋し生花は自然を自然の世界より藝術の世界へと切離すのではなく自然を今日に生かし更に明日に伸ひささんとする新き秩序への擴充である世界観であつて即ち自然の上に更に構成さるる自然の藝術觀であるか故に其表現に客観性と主観性の一元的融和に留意し高度の整備を試るべきである。

◎素材の自然性

生花は自然を素材とする自然の表現である限り何所迄か自然ハ

をしてノ自然ならしむべく藝術世界の構成に力点を置くを要するが故に先づ自然の本性と本情に就て徹底的なる検討をなし自然と是を遶る地理的季節的及び関係的象相を善察して藝術への知的認識を深むる事を最も必要とする。苟も自然の本性と本情とを明察する知的準備なくんば其藝術的構成が自然の自然たる表象を逸脱して唯だ単に生た自然の残骸を羅列するに過ぎ[illegible]而[illegible]明和ある。さ少は常に其の生平に存在する草木花卉の自[illegible]に就て種々の角度より[illegible]し総括画説して真[illegible]なる自然の本質を掴むことである。本性と本情を明にせずして構成されたる生花は既に其の根本に於て[illegible]誤謬あるが故に生命ある表現の成就せざるは[illegible]自然の羅列に止る構成は所謂死せる生花の残骸[illegible]留念して何時も明朗にして溌溂清美たして自然を自然とする[illegible]本格的生[illegible]花の表現世

界こそ現代生花の要求する藝術世界の大観であらねばならぬ

○素材としての自然

自然は甚の自然界に於ける環境に存在しての美の大観である。即ち天地を大きな背景としての有限の自然体であつて溌溂たる生命は其所に人生の美の到底企及し得ない自然美が明現され人生に親みと愛と慰と楽とを附与してゐる。春の櫻花夏の翠葉秋の紅葉冬の霜花等孰れも天地を粧る美的自然観であるが而も是等は幹枝茎葉花蕾果実を具象する全体的大観としての美的世界観であるが一たび幹枝を伐り採られたる時に於ては最早自然の態様ではあり得ない単なる一つの物的形体にしか過ぎない事を知るべきである。生花は斯る形体を其構成要素への一つの素材として採擇し茲に自然を自然とする藝

術的表現可能への世界へ移行し生命的な自然の相貌に端的に構成し完成ざれる自然の上に自然を一貫する自然美の様相である事に由て現代生花か魂あり聲あり香ある生命の一つ一つか絶体世界の観照に價値附けする所以である。從って素材は是か為に常に有機的に其性に依據して苟も其固有の本性を傷はざらんことを要する。

○自然に對する親みと愛

現代の時代生活に即する生花の表現に二つの重要点かある夫は第一に素材か生命ある植物体である限り季節環境種類に應し起死的な回生手段として所謂水揚けといふ最も的確にして敏く其所に叶ふ養生法を講すへきは勿論生命持續か夫か恰も地にある時と同し様相を以て生々せる溌溂さと清美とを持つことである。第二は素材の生花構成か亮く自然の様相に即して自然への高さへと高度の藝術的に行はれ得る藝術世界か其一つ一つを切離しても亦全体的にも而して生々せる溌溂美か漾ふ事である此二つか完全なる連繋を以て表現せられたる生花こそ現代の要求する今日に生きる自然を主とする生花（盛花）といふことか出来る譯であるか其根底は我々の花に對する心からなる親みと全靈を捧くの自然に對する愛となるとにあらねはならない苟も自然に對して親みと愛と慈みの心なくしては日本の國華としての現代の生活並に其自然的感情にピッタリと融合する現代的な生花（盛花）は生れ得ないのであることを知らねはならぬ

○全體的同化

現代生花は最も端的に自然に即せる國風藝術であつて亮く自然の美を捉へ自然的に美の布置排列の塩梅は空間の可込にも其比を見ない生命ある時間的空間的な高次の藝術な花である断

る生花が新時代性に即應して時代の要求する意圖と感情と希望とを盛りて自然に構成し自然を表現して室内適所に置かるる時一個の生花が持つ至上の藝術美は單に生花の觀賞者に與へる小世界觀の美觀點てなくして是が環境をも顧する其室に配備の物と物とに於て共通する全体的大世界觀の美へと成就する事に志向すべきである即ち

(一)花と花との融合
(二)花と花器との融合
(三)花と花器花臺との照合
(四)花と掛額掛軸との協和
(五)床と花並に配置された物との融合
(六)(一)乃至(五)の全体的諧合一如
(七)其他物と物との關係的統合

物と物との全體的統一の美的世界の大觀を以て融合同化されて分派的乃至孤立的な美の偏在性なく全一的に唯一への美をもて物の綜合的一如の境域に在りて始めて存在するもの即ち生花は其室にある物の全体を舉て一元的同化美の發揚でなければならない

□素材表現の基準

生花に採擇さるる素材は曾て有りし植物の自然たりし組織の一部分たるに止り既に切採られし瞬間に於て原態相たり得ないので從つて夫は全く自然其物とは云ふことは出來ない。唯單なる素材としての存在價値あるのみであるが花道は其所に現代の意戀を盛て素材の持つ植物の本性に遡行し自我の熱愛を加へて素材と我個との神的融純一することと齒て自然たるべく藝術化し唯一に自然の相象へと突進して始て藝術の高次化が際室的に表現さるるものである。故に生花は素材として自然への復活としての自然の持つ本性への嚴格なる復歸を要求し本性の適正にして且つまま素直に自然の本質に忠實なる事である。並に現代生花は植物を唯一の素材として斯る天賦の本性に本據して自然の全的象相を描き上るにあるが故に素材の本性に背くが如き我個の根據なき一概意思を要すべ

を加減するは即ち自然を冒瀆するも甚しきものであつて、厳に戒心すべき事である。要するに現代の新時代相に即する生花は忠実なる芸術意慾の下に行はるゝ表現が常に自然の本性を完全に少しの無理なく厳遮を素直に端的に表象することゝであつて畢竟日本花道に高揚さるる神性は此の如き意図の下に於てこそ始て顕現され其世界の自然相に一段の光明と尊貴さが加重さるる譯である。

○生花構成の標準

自然を強調して自らなる自然の神域に突入する事が現代芸術究成の世界思潮である。従つて是が構成はよく素材を見直し是を量一して其本性の自然性を検案し其性の向ふ方向と其角度に従ふ可きである。蓋し自然が自然たり得る美の世界観は其自然性に従ふて前後左右上下向背距離と側偏を空間的に馳走し所在的に定位して居る自然性の持つ斯る神性と特徴を的確に把握し自我の愛を熟と

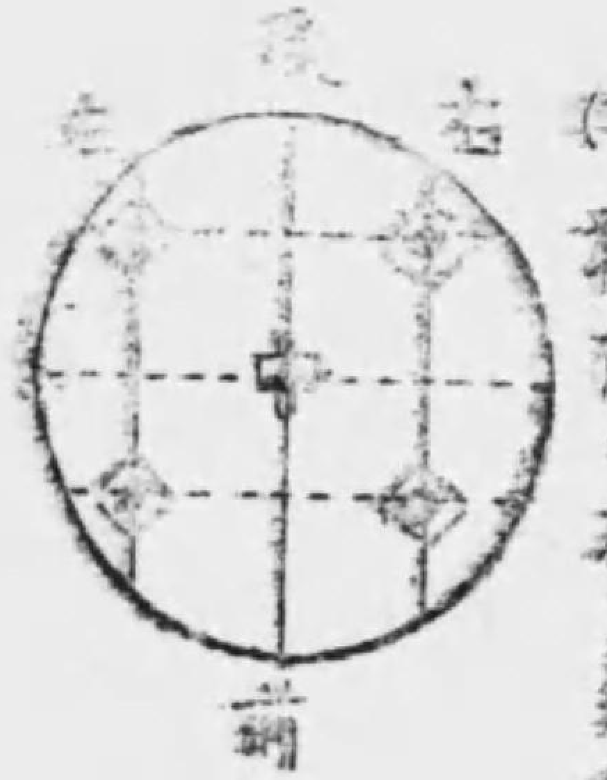
支從て自然から自然へと表現可能の世界への究竟と至真に生命ある生花が完成さるる譯である。即ち高きものは高く低きものは低く縦横向背の自然性を尊貴し山里水三界の地理的天理に従ふて生存の自然象相の方向と角度の是理性に何所迄も正しく力強く服従することである。茲に構成の自然の世界の中に線と点と面と形と色と形相あり其等の持つ常態と変化乃至調和の美諧調を明確に摑み斯て是を是正して我個のあるとし更に自然の真理性を透して自然への世界観の完成に意図すべきものである

○観照の角度的形式

現代観照への普遍性は生花（盛花）を一つの厳粛なる儀式的のものとせす接客應對時の飾物乃至服装飾的のものより家庭図案の期照的より社交的関係をして・社会生活の中に密接なる全般的に渉つて応用せられ広範囲に於ける世界の発展性が世紀の軌道に乗つて展開されてある是畢竟時代

思潮は自然的要素に基く結果あるは論を持たない所である而して是が理想の角度的形式として四つの方面がある

(甲)構成の原則的形式



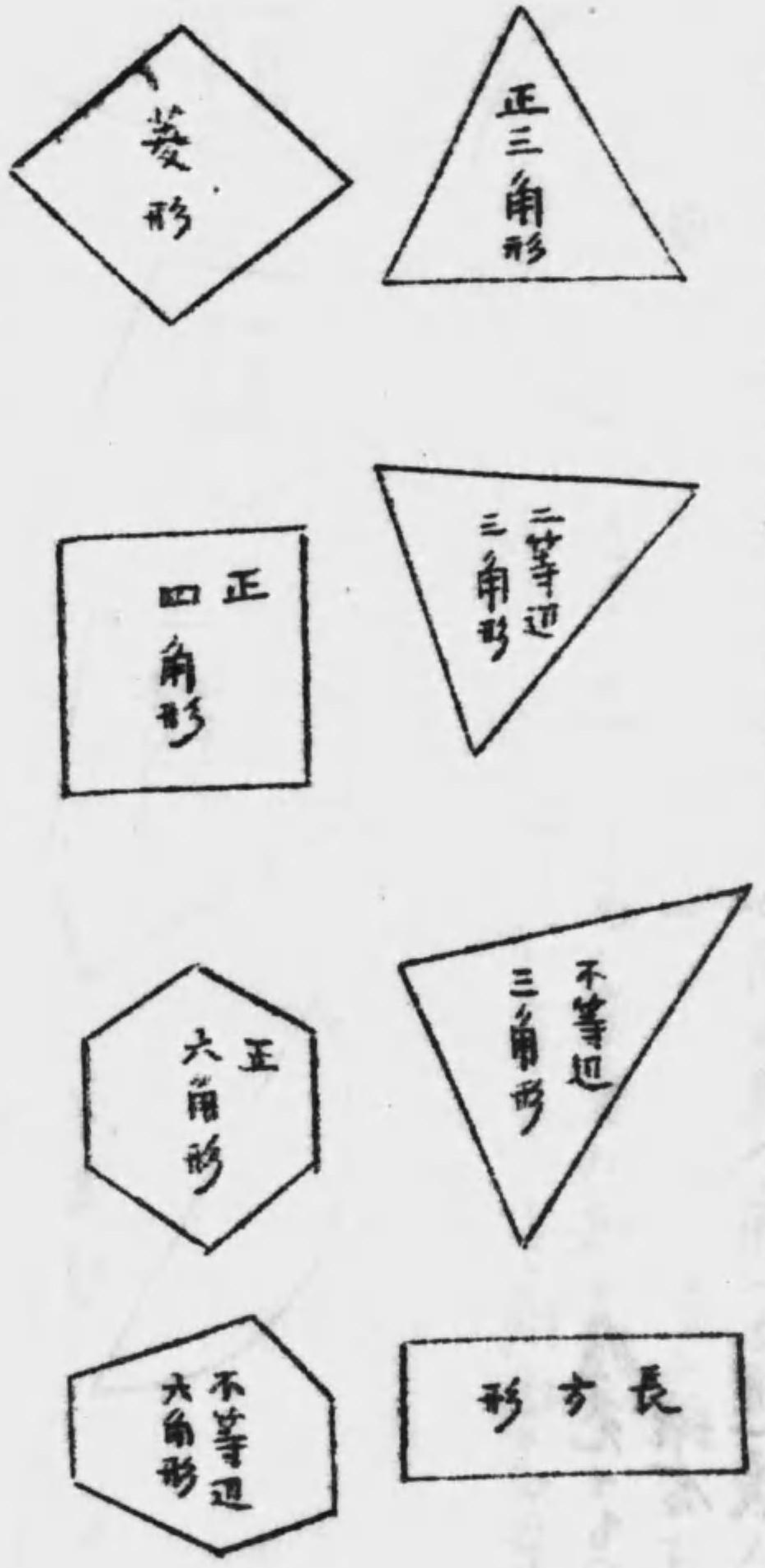
花器の廣きも狹きも圓の如くに之を三分してその中央部を除けて左右孰れかの◈印のある前又は後へ花を挿す

(乙)構成の應用的形式

花器内面の廣狹を問はず生花構成の体様に重点を置て器の何所なりとも適所に自個の好む所に其構成の基礎を置く

(丙)原則的角度構成の形式

素材の持つ自然の態様の種々相に基調して角度の構成形式は常に一定せず自然世界の表象に自ら完全すべき角度の形式に準拠するものとす



現代之花（盛花）の表現する構造の世界は
点を基礎とし点の発展的線の擴充であって
永遠性を盛た安定的立体三角の結合より
進て四角より五角六角八角へと進展し遂
に円相に窮極する是等の構成の中に影響す
る感情は美構成の基礎であり芸術学的線

条の結合は最も簡単なる示現世界より更に一層深い複雑な世界を
意味するものである従って自然の表象が芸術的に統合され真。善。美。
（従）の三位一体の世界観は我個の小主観での狭い世界ではなく日本
精神に基く万人の意慾する日本民族の創造に自然高揚の広い世界
であって此芸術観に真善美の限ない生命が宿り時空的に美の永
遠性が見られ其表象に全体的明朗と清新さを顕現して世界の悠
久なる生命を感得し由て其本質に触れ我個の生命に道徳感倫理
感。宗教感乃至社会観の理解から美的趣致に遊行し情操の陶冶か
ら人生の真の活きを感得するものであって茲に厳粛なる日本の花
道が世紀の光を浴ひて完成さるるのである

A) 一方面……前方面の方向一点より観照し得る表現上の構成
である

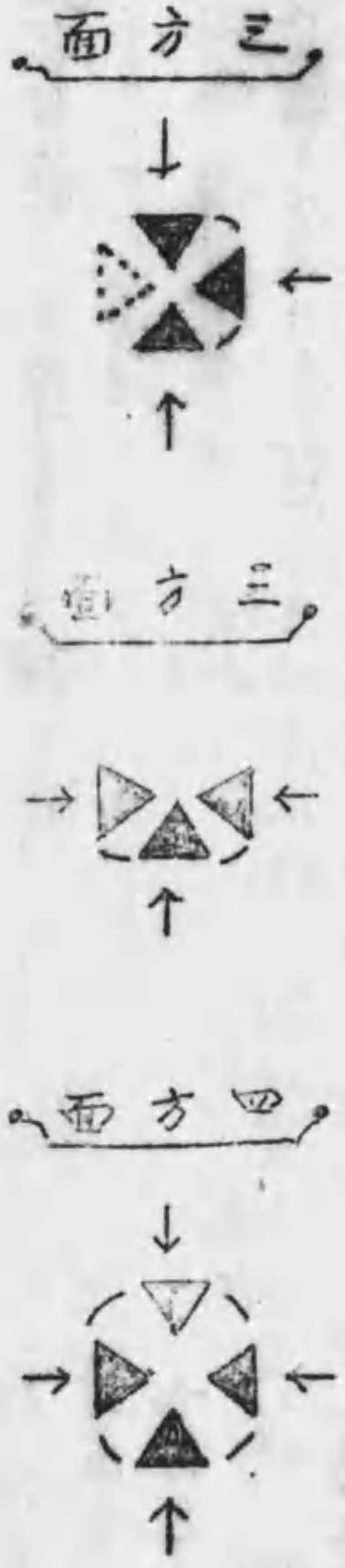
(B) 二方面……前方の一方面に左右孰かの一方面を加へて二方向よ

り觀照し得べく意圖せる表現上の構成

(C) 三方面……前方の二方面に左右の二方面を加へて三方面より觀照し得べく意圖せる表現上の構成

(D) 四方面……前後左右の四方面より觀照し得べく意圖せる表現上の構成

二方面に前方と其左右孰れかの一方面を加ふるものと前後の二方面とあり

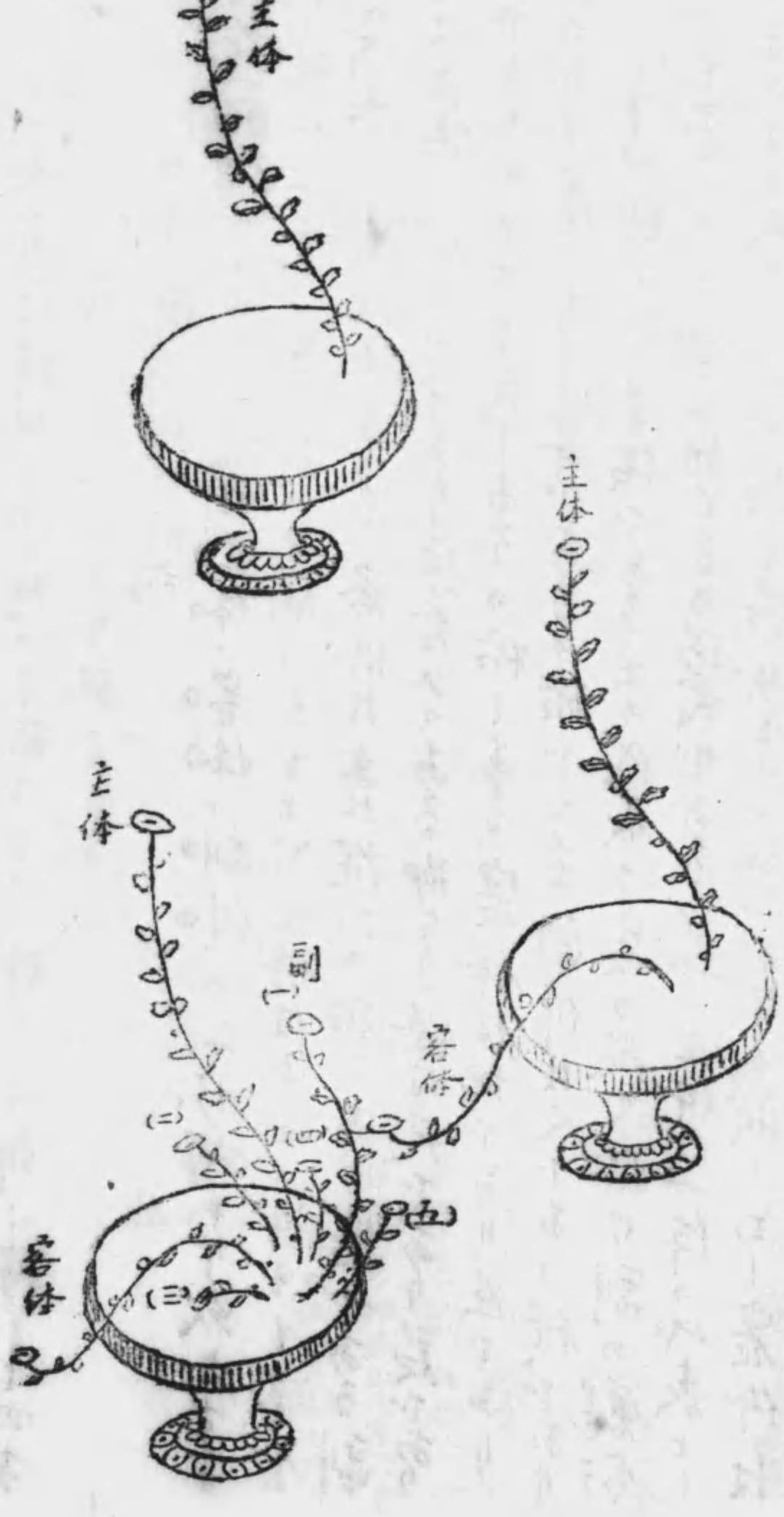


四方面は挿口を四ヶ所の方面になす時と一ヶ所に挿して四方面に觀照し得べき手法とがある

○藝術構成の形式

生花(盛花瓶花)構成の体様は主体・客体・副体の三形式より成立するもの或は單に是を主。客。副。と稱ふるもよい。主体は中心となるもので全体の代表格であり主である。客体は主に從ふの格であり客である副体は主客二体の添であり應合ひである即ち主体は天であり君であり父であり兄であり夫であるの格である。客体は地であり臣であり母であり弟であり妻であるの格である。副体は人であり僕であり子であり奴婢であるの格である主の代表を客の從で助け副の應合ひで主客の力を補ひ助くるの形式である。蓋し主体は一体の代表として客よりは丈も高く力強く嚴然として君臨するの状をなし客体は主を助くるの心で丈を主よりは低く力を弱め副体は主と客の体々への

緩急の添へとしの補ひである



○表現上形式の變化

素材の自然性に基調する藝術表現上生花の体相に七の形式の變化がある

(一)

平面体

構成する一体の体相が低くして俯瞰的に上より見下し氣味に観照すべく表現乃一形式である

○静的で平和的の表現相である

此形式に属従する自然は浮萍類より睡蓮。香菜。等の平面的な植物である

（静的静の様相）

（二）

直立体

直立体は直眞体又は立体（九十度角）と稱へ一体の体相が垂直的に直立する形式であつて嚴粛なる表現象相である
静的動で最も神聖である

（三）

斜体

斜体（中横体）四十五度角
斜に構成さるる一体の体相を表現するの形式
動的で進歩的である
（動的横相）

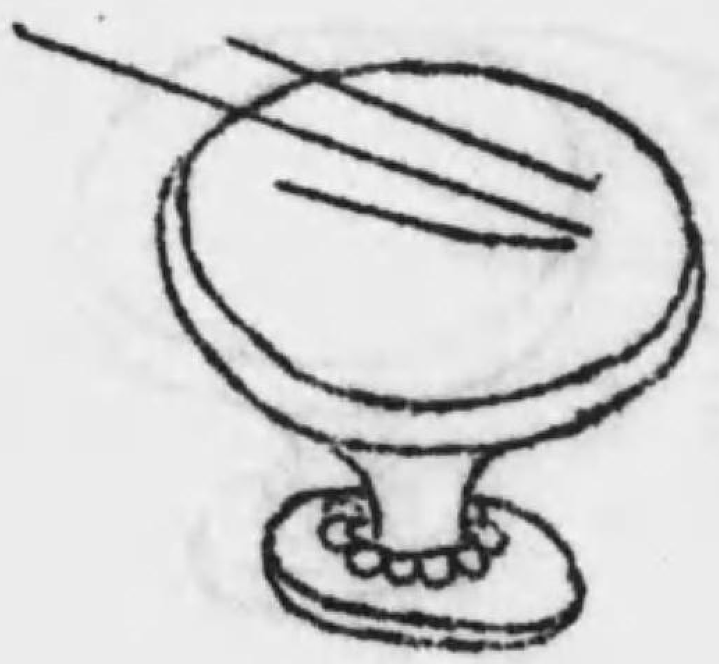
（四）

波動体

○動的で極めて活動的である
波動体は山容体ともいふ波の動くが如く又山々の連るが如き格段なる体相であつて自然波線の体相に従ふとする一体の体相を表現する形式（動的動）

（五）

横体



横体（二十五度角）横の位置に發展する態横にあつて一体の体相が横の角度に表現する形式
動的静である

(六)

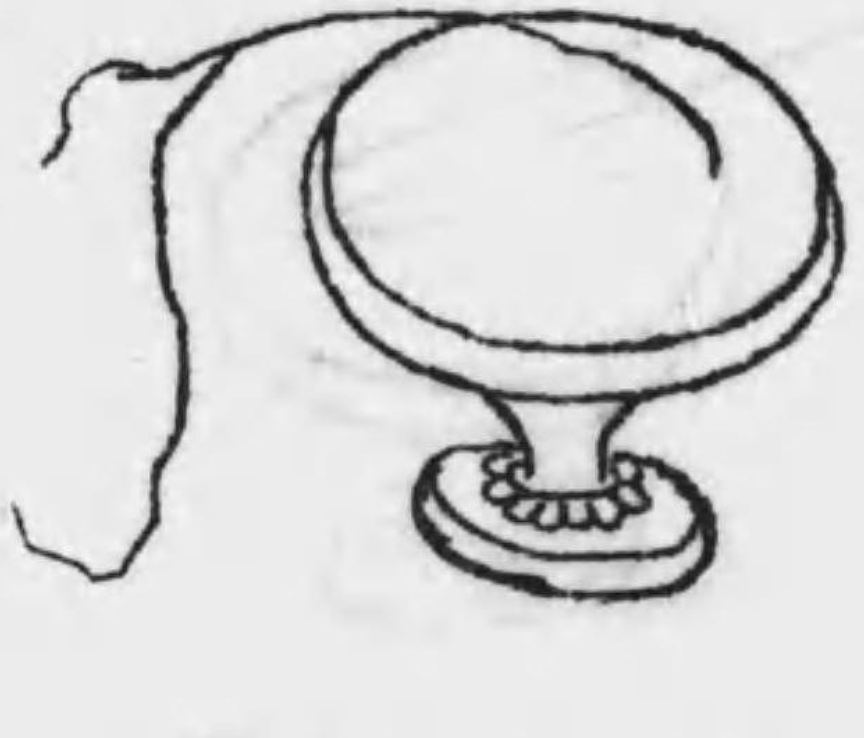
垂体

垂体(スイタイ)は下垂状に一体の体相を表現する形式
懸崖(ケンガイ)式とも單に懸崖とも
垂とも云ふ
静的動

(七)

水平体

水平体は一列的に並列する態様に一体の体相を表現せんとする形式
静的で平穏静寂である



○色彩の調和

生花(盛花・瓶花)は現實に生命ある自然を自然として構成する。現に生きてあることを絶對条件とする所は他の藝術に見さる特異の世界觀であるが故に甚世界に見る多彩の光波の性質と人生との関係的交渉感覺性歴史性宗教感道徳感を判定し由て表現さるる世界の上に調和性和合性矛盾性相尅性を明察して常に明朗にして清美なる觀照世界の創造に意慾すべきである。

白 親和的であつて孰の色にもよく調和するその順位は
第一か黒 第二か赤 第三 緑 蒼 青。藍。菫(スミレ)。紫。代赭。
不調和色は 黄
〔白色ハ積極的な色で動的で融和性である〕

黒 消極的・静止的で静的のもので厳粛的である調和順位は
第一 赤、白、黄、 第二 青。緑。 不調和色は 紫。鼠。茶。

赤
動的で積極的で発展的快活的である調和順位は
第一 白。緑。 第二 青。藍。 第三 黄。鼠。紫。茶。

緑
静的で平和的であり親和的である。自然の色彩中一番多いの
休息的である 調和色としては
第一 赤 第二 紫。鼠。紅。金茶

青
静的で消極的、空想的、過去の色である調和色は
第一 白。 第二 赤。
不調和色は 紫。鼠。茶。

紫
静的で消極的情緒的高雅的である調和色は
第一 白（上品） 緑（高雅） 藍。赤。黄。 第二 青（消極的となり）
不調和色は 黒。鼠。茶。

鼠
静的で消極的寂滅の色であり夢幻的である 調和色は
第一 淡黄。緑。紅。 第二 赤。黄
不調和色は 黒。紫

黄
静的であるが進歩的感覚的であり明朗性である 調和色は
第一 菫（スミレ）。紫。黒。茶。白。赤。 第二 青。藍。

茶
静的で消極的で沈静的である調和色は
第一 黄、緑。 第二 白。鼠。 第三 赤
不調和色は 紫。青。黒

○陰陽と數
陰陽は萬物生成の根元であり創造の源泉であり物の構造の基

本である即ち宇宙の諸現象は陰と陽の相對的和合に由て成立する。陰陽なしには何物も成就することは出来ない陰なくして陽が考へられない如く陽動く所必ず陰是に從ふ一即不離二にして一、一靜一動行藏進退して陰陽合一の可能に於て茲に始めて花道藝術の無限無極の相象世界が無終の發展相を以て嚴肅化さる。されば自然は陰陽合一の全現世界の大觀であつて一陰一陽動靜和合して茲に始めて自然の自然たるべき美が具象さるる譯である

花道は此陰陽成生の和合に根據し自然の自然たるべき美の構造にあつて組織する數の構成は常に陽數を採て表象への一般的道則として居る。即ち其發展は靜的である陰數を準備し動的なる陽數を高揚して世界の發展性を成就せしめんとして意圖する処に東洋的な日本趣致の尊貴性があつて

要は奇數（陽數）と偶數（陰數）の寄與する世界への創造に東洋的陰陽藏の正常化を基礎附けするにある。

○祝儀の花

日本は神の國であり祭政一致の肇國精神は美しき大和民族をなして國家の機構に家族制度を採り世界無比の日本精神を高揚して居り良風美俗の國民性は年中祭祀の儀式乃至社交的の行事に生花の素材としての植物の性情を全的に自然の深相に精神的な靈性を求め由て祝儀の花と不祝儀の花とを別けて居る

祝儀の花としては松竹梅、常盤物、櫻、菊、あけびの如き蔓類、白、赤、紫、綠、色の花、目出度名のもの。

不祝儀の花としては悪臭、有毒、有刺、枯木枯葉、名の悪きもの弱々しきもの枯れ易く變易きもの、色の悪きもの。

陽の位　松（陽の司）櫻。菊。芍薬。紅椿。蔎竹。杏。
蘇鐵。杉。[illegible]。朝鮮槙。桃

陽中陰位　梅。百合。柳。梨。李。柿。薔薇。白桃

陰の位　竹（陰の司）。藤。卯の花。萩。山吹。紅葉。
葉蘭。南天燭。鈴懸。白椿。枇杷。万年青。
大蘭。燕子花。芥子。水仙。山帰来

陰中陽の位　牡丹。福寿草。朝顔。晝顔。蓮。蒲。
睡蓮。三角草。密柑。李（スモモ）

陰中陰の位　秋海棠。桔梗。水葵。河骨。澤瀉。浮萍。

一女郎花。虞美人草。[illegible]。

素材たる草木花卉は花道藝術世界の構成に現實を表徴。並に性情と慣習、歴史と環境及び時代思潮とを一系し各前夜より橋渡して説花を表現を査移して後選擇すべきである

◎山里水（三界）

生花に供用さる素材は山里水の三界に生育し夫々先天と後天とに從って神意を体現してゐる所謂先天的出生後天的出生と云ふものが夫々である。現實の景観的出生に加へ職して本性の出性を明察し高は高く低は低く前後左右高低つ縦密にして主客副の三体を最も効果的たらしめ創造せる世界観を常に生命の躍動を生々しく且最も力強く感覚せしめなければならない。是が為に我生平に於て勉めて山里水三界

に於ける植物生育の状態を仔細に穿鑿し夫々の持つ特異の本性と本情とを明察し認識の確立を期して少も應用せ誤謬なからしめさる様企図すべきである。蓋し今日の生花は單なる外的相貌に止らず内的なる精神に近深度を顧以て内容に生き目的に生き調和に生き時代精神に生き斯て民族生活のよりよき糧を以って喜びを感ずる様に自個の眼とに喜々たる生きた生花を要求するが故に時代意図を望て常に正しく素直に自然の持つ然が有るべき靈的なる自然の全体を捉へ世界の創造を企図すべきである

○素材に於ける藝術的要素

生花は一の独立せる最高の藝術である限り是が構成は素材の自然たり得る性と情とをよりよく守り立てて最も適正妥當成就せなければならない。即ち其世界の構成要素たる点

乃至線の取捨配置は自然を通しての心眼にて高度的整理を行ひてよく其善悪を是正して自然的なる藝術手法の円満公正を意図すべきである。蓋し素材は大自体に複雑多岐性なるが故に宜しく藝術的心眼を通して是が適正にして妥當なる選別取捨を行ひて其体の最重要なるものを採擇して是に季節感を盛て世界の完成を企図すべきである。繁は簡明に雑は純正に崇高と典雅に全体をして生々と活かす事に由て蕪雑なる素材も茲に自然を通しての自然たる美的藝術の完璧が期待せらるるのである。昨日の花は最早今日の花でなく今日に夢して明日に開く花は宜く明快に直截に時代の感激を盛て深く社会生活の意慾に突進しは本民族の要求する國華的藝術の完璧を計らなければならない

昭和十一年五月。花ノ文庫。雪之巻

續く

411
52

昭和十六年五月一日印刷　高知市北奉公人町四八
昭和十六年五月八日發行　發行所　末生會本部
發行兼著作者　高知市北奉公人町四八　北村大景
印刷所　印刷人　高知市北奉公人町二十　山本兼猪

終